第3章 命を育てる

骨を砕く

「命の花プロジェクト」が生まれてから4年が経ちました。同プロジェクトは愛玩動物研究室の授業の一環として現在も継続しています。

同プロジェクトの実習は、県動物愛護センターから譲り受けた骨を細かく砕き、肥料用の骨粉にすることから始まります。

始めに全員で合掌してから、レンガで骨を砕きます。作業は全て手作業。殺処分された動物たちを土に還すため、最後は温かい人の手で行いたいという思いからです。レンガをドスン、ドスンと振り下ろしたり、こすり合わせたりして、骨が少しずつ砕かれていく音とその感触に耐えられず泣き出す生徒もいます。「自分のやっていることは正しいのか」生徒たちは、作業を行いながら自問自答し、動物たちの魂と向き合います。「動物たちが無残に殺されることがないように」「自分たちがもうこんなことをしなくてもいいように」と祈りながら。

骨をレンガで細かく砕く作業。生徒たちの胸にさまざまな思いが巡ります

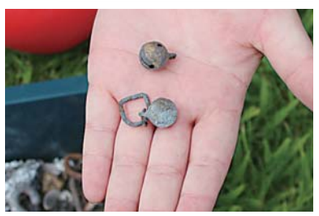
殺処分された300匹分の骨たち

骨を分配して作業の開始です

恵まれなかった動物たちに手を合わせ“合掌”

「つらい、つらいけど花としてよみがえってほしい…」

ふるいにかけて、粉状に


生前着けていた首輪の金具。人に飼われていたことが分かります

失われた命を育てる

砕いた骨はていねいにふるいにかけ、骨粉は貴重な肥料にします。

土を9割、骨粉を1割混ぜた培養土をポットに入れ「きれいな花を咲かせるんだよ」と願いをこめて、生徒たちは、ひとつひとつ花の種をまいていきます。

砕いた骨を土に混ぜてポットに移し

ピンセットで優しくつまみながら播種

やがて芽を出し、苗が成長するころになると、まるで彼らが生き返ったような気がするといいます。

そして開花。愛情を込めて生徒たちが育てた〝命の花〟に、動物たちの命がよみがえります。人間も動物も亡くなればやがて土に還り新しい生命の源となる、原始から続く命の循環です。

この花たちは、イベントの「鉢上げ体験」などで、新しい「里親」に引き取られていきます。

芽を出した命の花。マリーゴールド（花言葉：生命の輝き）とケイトウ（花言葉：感謝）を育てています

インタビュー

愛玩動物研究室に所属する２年生は、最初の１年間は、動物の世話や管理を行い、動物を飼う責任や覚悟を身に付けます。

平成28年９月５日。２年生は、初めて“骨を砕く”作業を行いました。生徒たちはどのように感じ、どのように受け止めたのでしょうか。

石田（いしだ） 華恋（かれん） さん

みんな個々で生きてきたのに、殺処分され一気に焼却されて、その後は骨もバラバラになってしまって、かわいそうだと思いました。思ったより動物の骨は固くて、細かくするのは大変でした。みんなカタチがあったのに、粉になってしまいました。とても複雑な気持ちです。

久保田（くぼた） 穂花（ほのか） さん

骨を叩くとすぐ粉状になって、何と言うか、もろさが手に伝わってきました。

人間よりもすごく小さな骨で、何匹入っているかも分からないくらいの小さな骨です。

早く殺処分がなくなってほしいです。

レンガを持つ手も心も痛くてたまらないです。

中野渡（なかのわたり） 潤也（じゅんや） さん

体験入学の「命の花の鉢上げ体験」でこのプロジェクトを初めて知りました。入学後に詳しく知って「こんなことやっているのか、大きな目的ですごいな」と思いました。

今日の作業は思っていたより心にズシーンときました。「これらが捨てられて殺処分された動物たちの骨なんだと思って。うちで飼っている犬にはこんな思いはさせない」と思いながら砕いていました。